いひて五十万の生靈の硝煙鼓譟の中に贖罪の血を注ぎ、而して二千万の聖民の新禱と克己勉勵との結果として漸く干戈を收るに至りしや、震怒の神の最終の罪の値として國父アブラハム＝リンコルンの生血を要め玉へり、然るに内亂の餘弊の未だ是等義人の流血を以て洗淨する能わず、南北未だ怨恨の念を絶たず、兄弟墻に相鬩する時

剛直の愛國者ジエームス＝ビー＝ガーフヒールドが正義の犧牲と成りて狂人の毒手に斃るゝや、國民始めて同胞相爭の非を悟り、半百年間の紛爭わ全く跡を絶つに至り、公平なる共和政治はアレガニー山脈の全長に添て洽く、ミシシピの清流は安らかに海に入るに至れり。

オレンジ公ウヰルヘルムの寶血わ實に和蘭共和國を狂王フヰリップ第二世の手より救ひしものにして和蘭國三百年の隆盛わ實に彼の殉死の功の然らしむる處と謂わざるを得ず。是を小にしてわ一家に放蕩子あらんか、父わ彼が爲めに憂愁腸を斷ち、弟と妹とわ慚恨寢食を忘れ、而して母わ煩悶遣る方なく、心痛いや增して病を釀し、苦慮の極終に愛兒の名を唇にして命を終るや、岩石の如き愚子の心も始めて解け、闊然として悔悟し、天父の免を乞ふに至る。

無限の慈悲なる神が何故に人の血を人より要め給ふかわ深遠なる秘密として存すべけれども、人を人と聯結し、人類を以て推察的の組織躰とおさんが爲めに此聯帶責任こそ人類の最大必要なる事わ日々を見るよりも明かなり、若しユニテリヤン教の唱ふる如く人わおの其荷を負ふべきものにして他人が彼の罪を負ふべきの理なしとの教義にして眞理ならしめバ何故に無辜の黑奴わ熱情なるガリソンの辛勞を要せしや、何故に可憐の瘋癲病者わドロテヤ＝ディックス（共にユニテリヤン教信者）の天使樣なる推察と勤勉とを要せしや、然り我わ他人の罪を負ふべくして、他人わ我の勞を任ひくれるなり（加拉太書第六章二節）、我わ之に依て我わ我一人の我にあらずして我身に

人類全躰の責任を負ふことを知る、我は我が隣人の受くべき苦を我が身に受け、隣人の痛を減じ得るを以て我が人たるの無上の榮光を有するなり。

人類社會は實に義士仁人の功德に依て成立するものなるが如し、義人の適宜なる比例が社會の存在に必要なるが如し、邦家の滅亡が策士の欠乏より來らずして正義者の數足らざるより來るなり、神アブラハムに告て曰く「我若しソドムに於て邑の中に五十人の義者を看ば其人々のために其處を盡く恕さん」と、古昔より今日に至るまで德盛に正義行はるゝ邦國にして敗亡に歸せしものあるを余輩の未だ聞かざる處なり。

生命の父なる神が人類の全滅に至るを好み給はざるを以て絶へず高潔の人を世に降し其腐朽を癒し其不淨を排ひ給へり、人類社會の生存が實に絶間なき精氣の注入を要す、義人アベルが兄カインの毒手に斃れてより以來社會の腐蝕が實に義人の寶血を以てのみ止められたり、而して神が人類全躰の大傷を癒し、地球と之に棲息する人とをして全能の意志に定め置き給ひし幸運の位置にまで引上げんと期し給ふや、神自ら肉躰を取て此濁世に降り、無窮の德源を此所に開き給ひしとの音が、愛なる神の存在と、人と神との關係とを了知する者に取て決して信じ難き音にあらざるなり、曾て希臘の古哲が彼の時代の腐敗を看て「天の神自ら來て世を救ふにあらざれば此世が決して救はれざるなり」と歎せし言が人性自然の發言と云はざるを得ず、世を救はんが爲に神の降世を要せずして義人英雄の輩出にて足るべしと信ずる人が國賊猖獗を極め、天兵威を振はざるに際し、猶も天子の御親征を不必要なりと云ふものなり、奸佞の國土に蟠るあり、聖天子の民を愛するあり、御親征は民の渴望する處にして亦聖意の存する處なり、節刀錦旗已に賊膽を寒からしめたり、龍躰親

しく陣に臨み給ふ、寇敵の壞滅日を待たずして期すべし。

神昔は多の區別をなし多の方をもて預言者により列祖よ告給ひしが、この末日にハ其子に託て我儕に告たまへり、神ハ彼を立て萬物の嗣とし且つかれを以て諸の世界を造りたり、彼ハ神の榮の光輝その質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持われらの罪の淨をおして上天に在す威光の右に坐しぬ、彼が受し名の天の使者の名よりも愈れる如く彼等よりは愈れり、

（希伯來書一章一—四節）

無限の仁愛世に臨めり、其德流流れて永遠に至り、此世が化して天國となるの基ハ神の子耶蘇基督の降世に依て開かれたり。

人の贖罪力の多寡厚薄ハ彼の品性の高卑と並よ彼の身に引受くる苦痛の嚴寛とに正比例あり、罪人若しその犯せし罪の罰として適當なる刑に行ハるれバ彼の苦痛ハ一の贖罪的の功を有せず、何人も彼の所刑よ依て積極的の利益を得ることなし、然れども爰よ竊盜罪を犯せしものありて裁判官の不正よりしてか或ハ辯護人の不親切よりして强盜罪の罰を受けしとせんか、彼の所刑ハ衆人の憐む處となり、その影響ハ終に判官或ハ辯護人の身に及び、彼等をして不正不實を後悔せしめ、後來を慎み再び前轍を踏まざらしむ、此に於てか不當の所刑ハ他の罪人を不當の刑罰より救ひたり。

今例を變じて全く無罪のものが强盜罪の刑に處せられしとせん、彼が裁判人と社會一般よ及ぼす感化力ハ前例の比よあらず、而して一歩を進めて此刑罰に處せられしものハ罪なき人なりしのみならず義人なりとせんか、彼の贖罪力ハ彼の善行の著しかりしと彼の受けし刑の重かりし比例よ增加するものなり、無辜の臣民誅戮せられ、小吏掠奪を止め、義農宗五郎磔せられて佐倉の鄕民虐政を免かる、會藩の歸順は三老の切腹を要し、維新事業の實成ハ甲東參議の血を以

て封せらる、ラチマー(Hugh Latimer)燒殺せられて殘忍なるマリヤの勢力頓に衰へ、ハムプデン戰場に斃れてスチユアート家の衰運已に定まれり、義人の死に勝る勢力の世に存するなし、死せる孔明生ける仲達を走らす、萬軍の以て斃す能はざる虐王奸臣も義人の死に依て斃れざるはなし、罪人苦痛を以てのみ消滅し得べし、血を流すこと有ざれば赦さるゝ事なし。(希伯來書九章二十二節)

或人曰へり「神人無限の愛なり、神我儕の罪を赦さむとならば贖罪の途を經ざれば」とて彼の特權を以て我儕を救し得るなり、我儕父母たるものゝ其子が罪を悔い來て免を乞ふ時直に其咎を赦すにあらずや、況んや神に於てをや、贖罪の事たる亞細亞的專政君主が其下民を罰せんとするに當て或る嬖臣の仲裁と哀訴とに依て其罪を赦すに類する處置にして神に關する最も野蠻的の思想と謂へざるを得ず、單純高尚なる神の思想と贖罪の迷愚を棄却せざるべからず」と。

實に然るか、我儕父母たるものゝ實に理由なくして我儕の子供の咎を赦すか、勿論未だ左右を辨へざるものゝ罪人未だ罪と稱すべきものにあらず、然れども已に罪の罪たるを知る子にして罪を犯す時人適當なる理由なくして彼の罪人赦すべからざるなり、而して嚴父人決して然かせざるなり、是父たるものゝ威嚴を存するが爲に必要なるのみならず、亦子たるものゝ意志の自由を重ずればなり、理由なくして其子の罪を赦す父人其子を愛せざる父なり、彼若し父たるの特權を以て子を赦せば其結果人一家の不取締となり、其子の公義心を鈍からしむ、眞正の愛人慈悲と正義との結合なり、吾人法律的の感念が基督の十字架の死を以て人類の罪を赦さんが爲に神の公義を滿足せしものと見做すに至りし事人決して理由なきにあらざるなり。贖罪の適例として常に擧げらるゝ事實人羅馬の歷史家バレリウス、マキシムス(Valerius Maximus)の記事に係る希臘王ザリユーカス(Zaleucus)の事

跡よして天道溯原著者の筆に成るものは左の如し、

昔希臘王有二新例一作姦者無レ論二貴賤一必刺二其雙目一成レ替以爲レ罰不レ科定レ例後皇子偶犯二淫行一王聞レ之不レ勝二憂慮一若不二按レ例加レ罰既恐下民有二匿レ親廢レ法之論一而民心上不レ服若按レ例加レ罰則已盲二其目一不レ能レ臨二理天下一而社稷無レ主事在二両難一不レ得レ已以二己之一目一易二其子之一目一上以循レ例下以全レ情夫皇子不レ得二苟免一於刑一王猶爲レ之共受二痛楚一既仁義之而全民自感二其德一而服二其教一

人類的を以て誇稱する近來の或神學者ハ此種の實例を以て已に時世後れのものとおし、法律的の贖罪論ハ背理逆說として受けざるに至れり、余輩ハ茲に古說の辯護を試むるの餘白を有せずと雖も、一事讀者の注意を乞ふべきあり、即ち所謂人類的思想の進歩ハ延て法律的思想の緩慢を生じ、愛と慈悲とを混同し、愛をして愛たらしめざるに至りしことは是なり、惡を憫むと稱して惡を憎まず、苦痛を見るは堪へざる肉慾的の感情に支配せられて正義を實行することに躊躇するハ此十九世紀文明の婦女的の弱點たるハ識者の已に識認する處なり、一世紀以前に於ける貴族の獵場内に於て兎一疋を殺すものハ死刑に處せられし不情不義に反して今ハ公然たる詐欺も白晝の盜賊も證據不充分の一言の下に無瑕の人と成るを得るに至れり、是を今世人の法律的感念の痴鈍と謂ハずして何ぞや。

眞正なる悔改ハ嚴格なる法律の下にのみ起り得るなり、罪の罰より免かれんとするハ眞正の悔改にあらず、法律的の償贖を示さるゝにあらざれバ赦免の宣告に接するとも之を信せざりしルーテル、バンヤン輩の直實なることハ放緩と寛容とを混同する軟神學者の推量し能ハざる處なるべし、是ゝンリー＝マーチンの稱する「寛大なるべけれども基督教的あらざる精神(Liberal but not Christian spirit)」として神愛の深さと廣さとを了知するものと謂ふべからず。

「罪の赦」とは赦すものと赦さるゝものとの相互の働作より來るものなり、赦さるゝものゝ只に後悔の感念を以てすべきのみならず悔改は符ふ果(馬太傳三章八節)を以てせざるべからず、而して赦す者も亦只に心に赦すのみならず放赦の實(贖罪)を以てせざるべからず、悔改の實と放赦の實と両ながら擧て素めて罪ゝ赦さるゝなり、神ゝ悔改の果を結ばざる罪ゝ赦し給はざるが如く、我等も放赦の證明なき赦免ゝ信じて受くる能ゝず、之我等の信仰の足らざるに依て然るにあらずして我等に存する天與の理性が請求する處あり、新約聖書が重きを神の契約に置くも此に存するなり。

而して基督の生涯並に十字架上の死は神が人類の罪を赦し玉ふの證明あり、即ち基督の贖罪とゝ神に於ける罪の赦の實なり。

夫れ贖罪の原理たるや自然界普通の理なり、礦物界に於てゝ之を動力の平均(Equilibration of Forces)と云ひ、生物界に於てゝ治癒の作爲となりて顯ゝれ、心靈界に於てゝ贖罪とゝなるなり、空氣中に氣壓の稀薄を生ずる所あれば四面の空氣ゝ平衡を得むが爲に此所に向て進入し、氣壓全く平均を得て氣躰の流動素めて止む、即ち厚濃なる部分ゝ稀薄なる部分の爲めに空氣の幾分を供したり。

樹木其一枝を失へば全木之が爲めに苦しみ、各枝各葉其養汁の幾分を放捨し、損所を癒さむことを勉む、而して自覺の性を有する心靈界に於てゝ援助推察は道德的義務として存す、故に我等の中に一人の苦痛を感ずるものあれば社會全躰ゝ彼と共に苦しみ、我等の快樂の幾分を殺で被難者を救ゝざるべからず、社界一局部の損害ゝ全部之を負擔せざるべからず、健康部の犧牲に依てのみ疾病部を治療し得るなり、人類ゝ肉躰を以て物質界と聯續すると雖も靈魂を以て心靈界の一部分を形造るものなり、神と天使と人類とゝ靈界組織の機關(Members of spiritual kingdom)なり、故に人類の墮落と罪惡とゝ神と天使

と、影響せざるを得ず、人類の救ひざるべからず、而して之を救ふものの絶對無限の靈なる神自ら人の爲めに苦まざるべからず。

まことに彼のわれらの病患をおひ、我儕のかなしみを擔へり。我若し腕に大傷を負へば我の心臟と胃と肺とのの異常の働作をなして之を癒すが如く、地球表面億万の人靈が死せんとするに當てのの靈なる神の異常の働作を以て罪を贖のざるべからず、是奇跡なるが如くして自然なり、異例なるが如くして普通なり、驚くべくして當然なり。

勿論基督の肉躰上の苦痛は彼の心靈上の苦痛を表せしのみ、敵罪の恩惠の彼の神經的の疼痛によりて來るにあらずして心靈的の憂愁によりて來るなり、カルバリー山よあらずしてゲスセマヂ園こそ人類の罪の贖のれし所なり、基督よ棘の冕を被らしめしものの我の罪なり、彼に苦き盃を飲まさしめしものの我の罪なり、彼を十字架に釘たせしものの我の罪なり、天主教徒が常よ十字架形を身に纏ひて基督を思ひ、誠實なる新教徒某が常よ十字架上の耶蘇の像を机上に置き「汝の罪が基督よ此苦痛を與へたり」と獨語して己の罪を責めたりとの迷信邪説として悉く排すべからざるなり。

汝尚は余に問て曰のんか「何故よ神の自ら苦しまざれば人を救ふことの能のざるか」と、余の汝に問のん何故にハワードは彼の英國の居寓よの安居して歐洲の監獄を改良し能のざりしか、何故にリビングストンの彼の故國に於て黒人の爲めに熱心なる祈禱を捧ぐるのみよて亞非利加を救ひ得ざりしか、罪を贖のずして罪を救のんとするものの貧者に食と衣とを與へずして汝安然あれと云ふものあり(雅各書二章十五、十六節)の行おき信仰の死せる信仰あるが如く贖のざる罪の赦の虚言なり、基督の十字架の神愛の實証あり。

基督の死に依て神の身を神よ托する(Believe, leave)卽ち信ずるものを救

ずを得るに至れり、神の赦し度きものを赦し得るに至れり、(神の何事をも爲し得べしと雖も正義に合ハざる事ハ爲し能ハず)、故に基督ハ人の爲めにのみ生命を捨てずして神の爲めにも死し給ひしなり、基督ハ血の流るゝ手をひろげて人類に悔改を勸め給ふと同時に、神をして人類の改悔を納めて彼等を赦すの途を開きたり、基督の十字架ハ實に恩惠の新泉源を開きたり、神ハ基督に依て尙一層の神愛を自現し給へり、基督曰く

我もし地より擧れなバ万民を引て我に就せん若(我)ゆかずバ訓慰師なんぢらに來らじ

と、人類が神に來らんとするも神が彼に來るものを受納んとするも、先づ神の子ハ十字架の死を受けざるべからず、之れ聖經の明白なる敎義にして吾人の理性と情性とが共に請求する處なり。

ユニテリヤン敎幷に「新神學」が贖罪論に反對するの大理由ハ贖罪論ハ

ハ意志の自由を否定し、個人的責任を取り去ると云ふにあり。然れども余輩ハ意志の自由を否定せざるあり、我を基督に託すると託せざるとハ全く我の自由にあり、我の基督てふ不可謂神の賜物を受くると受けざるとハ全く我の撰擇に依るあり、我ハ我の自由其物をさへ全く神に捧げまつるも之亦我の自由なり、Our will is ours to make it thine 我の義を以て神の前に立つか或ハ全く我を殺して(Selbsttödtung)神の義を以て義とせらるゝか之亦我意志の自由を以て撰ぶなり、我若し歩行して東海道を上るにあらざれバ我の意志に依て上京せしと云ふ能ハざるか、我れ文明の恩澤に預かり、我が身を機關師の鐵槌に任かし、快樂と平安の中に短時間内に我の旅行を終りたれバとて我ハ我の意志の自由を失ハず、亦怠惰怯弱を以て我を嘲るものハあらざるなり、我ハ意志の決斷に依て脆き我の意志と行爲とに憑らずして我が全身を擧げて基督に任かせしなり、我を我が旅行先迄運り屆

けしものゝ機關師なり、我を機關師に委ねしものゝ我なり、我を救ひ我を天國に送り届くるものゝ基督なり、我を基督に托せしものゝ我なり、是れ聖經に所謂信仰(依賴)を以て救ゐる、との意なるべし、故に贖罪の教義ゝ之を信ずるものをして無責任たらしむとの批評ゝ全く據る所なき評なり。

亦贖罪の教義は道德觀念を排除すべしと云ふ人ゝ未だ贖罪の目的を解せざる人なり、伊太利の山賊がアペナイン山中に旅人を殺して其貯貨を奪ひ、然る後國法に處せられん事を怖れ、羅馬に到り彼が贖取せし寶貨の一分を寺院に寄附し、法王の捺印ある免罪狀を受くれば警官ゝ彼に手を觸るゝことを得ざりしとゝ中古時代の昔話なり、基督の贖罪若し如斯ものなれば實に治世の大害物にして一日も社界に存すべきものにあらず、基督ゝ我が罪を死を以て贖ひ置き賜ひたれば我ゝ善事を爲すに及ばず、又惡を行ふも危險なしと信ずる人ゝ未だ基督の贖罪に與からざる人なり、

然れば我儕何を言んや、恩の增ん爲に罪に居べき乎、非ず、我儕罪に於て死し者なるに何でなほ其中に於て生んや

(羅馬書六章一、二、節)

贖罪の目的ゝ我を完全なる人となすにあり、而して我が基督の贖罪に與かるに至りしゝ我ゝ親ら勉めて完全なること能ゝざれば、故に贖罪ゝ道德の終局なり、道德の終る所是れ宗教の始まる所なり、宗教ゝ道德の上に建てり、道德の粹是を宗教と云ふあり、創めに摩西の律ありて後に基督の恩惠あり、未だ律の嚴格なる綱を以て己を縛りし事なき人ゝ基督なる放免者の恩惠に與かり得ざる人なり。世に贖罪の教義を以て自己の不德を蔽ゐんとするものあるゝ實に歎ずべき事なり、然れども是れ教義其物の罪ならざることゝ余輩の辯を待ずして明なり。

高尚なる眞理の盲者の玩弄する處となるは何人も知る處なり、自由思想の佛國革命てふ悲戯を演せしめしとの故を以て排すべからず、プロテスタント主義の三十年戰爭の源因たりしとの故を以て輕すべからず、基督の贖罪の義を慕ふもの、休所にして愚人の隱遁所にあらず、先づ舊約的の嚴重なる道德を敎へずして直に新約的の柔和なる恩惠を說くものの自活の道を踐まざる子供に莫大の遺產を讓る愚父を學ぶものなり、如斯子供にして懶惰柔弱無氣力なる者の多きの決して怪むに足らざるなり、然りと雖も謹直恭謙なる子供にして誠意以て父の志を繼がむと渴望するものに嚴父が與ふる億萬の財產を以てすればとて吾人の父の不正を唱へず、又子の怠慢を慮からざるなり。

世の天性の善人なるものあり、卽ち生れながらにして圓滿なる性を有し勉めずして善良たり得る人を云ふ、或人曾てエモルソンを評して曰く「彼の生れながらの聖人にして天啓敎の助を借らずして完全の最も近く達せし人なり」と、或の神聖なるプラトー(divine Plato)の如きあり、或の正直の現像なる孔子の如きあり、是れ人は基督の贖罪に與からずして完全に達し得るの證にあらずや。

此問題を充分に考究せんとするの此小著述の能く爲す能はざる處なり、然れども余の茲に二個の注意を讀者に促がさんと欲す、卽ち、

一、基督敎的の善人に一種異樣の特性の存するありて其溫雅の希臘哲學も堯舜の遺訓も決して養生し能はざる事、

二、當時基督敎國にありて基督敎の恩澤に與らずして善人たり得ると誇る人は大概熱信なる基督信徒の子孫にして、其人彼自身の直接福音の恩化に與からずと雖も其父其祖父其曾祖父に於て充分に基督敎の感化を蒙りしものなる事是なり。

エモルソンの父ウヰリヤム、祖父ウヰリヤム、曾祖父ジョセフ、五

代目の祖ジョセフの皆悉く牧會説教の職を主どりし人なり、ウェンデル＝ホルムスそのエモルソン傳に曰く「エマソン家の血統に教法師の多きの著しき事實なり」と、如斯祖先を有するエモルソンにしてプラトー、シエークスピヤを尊崇する事或の基督に勝しと雖も余輩の彼に基督教的の君子の風采ありしを決して怪まざるなり、若しエモルソンにして印度支那に生れん乎、彼の教育と思惟の傾向の彼をして決して「新英國の聖人」たらしめざりしや疑ふべからざるなり、エモルソンが福音的基督教の庇陰に依らずして基督教的の君子たるを得しが故に何人も福音に依らずして彼の如く成り得べしと信ずる人の今日の米人は戰のすして獨立自由の幸遇に居るが故に何れの國民も改革時期を經過せずして自由獨立の國民たり得べしと妄想するものあり、合衆國民今日の自由の「モントフォルト侯サイモンがイーブスハムの戰場に斃れしより以來、ハムプデン、チヤタム、ワシントン等無數の英靈が血を注ひで買ひ取し「サクソン」民族の自由なり、ユニテリヤン教が下賤して以て迷信妄説と見做す贖罪の教義も亦彼等の祖先を罪戾の苦より脱せしめ心靈上無限の自由を給與せし秘訣なり

エモルソン嘗て曰るあり、

じ事を忘るべからざるなり、

余の曾て余の肉躰を以て余の靈魂の敵と思ひし事なし、余は實に自然の子供にして西瓜が夏の日に太陽の光線に暴されて膨脹するが如く余も善良なる自然の擁護の下に心樂しく生長するものなり、と、

保羅の曰く

善なる者の我すなわち我肉に居らざるを知る、その願ふ所われに在とも善を行ふことを得ざればなり、われ願ふ所の善の之を行のず反て願のざる所の惡の之を行へり、若しわれ願ざる所を行ふときは之を行ふ者の我に非ず我に居るところの罪なり、是

故ゑ我善を行わんと欲ふ時に惡の我にをる此一の法あるを覺ゆ、蓋われ內なる人に就て神の律法を樂めどもわが肢躰ゑ他の法ありて我心の法と戰ひ我を擄にして我が肢躰の中にをる罪の法に從わするを悟れり、噫我困苦人なる哉、この死の躰より我を救わん者わ誰ぞや(羅馬書七章十八―二十四節迄)と、

醫師の熟練を最も強く感ずるものは病者なり、特治藥の爲めに最も熱心に叫び求むるものわ危篤患者なり、余の不完全極まれる性わ余をして救罪を渇望せしめたり、――嗚呼神の奧義わ深かな、神わ遺傳と境遇と天性と幸運との作用に依て神の善人を造り得べく、亦遺傳ゑ反し境遇ゑ逆ひ天性を枉げ不運を轉じ罪人をも彼の子供となし得るなり、或人マホメットゑ問て曰く、

何が有ゑして何が無なるや、

答、神なり、世なり。

誰が人にして誰が禽獸にも劣るものなるや、

答、信者なり、僞信者なり。

何が最も醜にして何が最も美なるや、

答、信者の後悔なり、罪人の改悔なり。

若し哲學者ライプニッツの曰へる如く「人類の墮落ほど人類を高めしものなし」とせば、罪を犯せしものほど神の愛を感ずるものわなかるべし、然れば罪を感せざるものわ基督の愛の深と高と廣とを感じ得ざるか、讀者自ら此問に答へよ、聖靈わ直に汝に敎へん。

讀者わ余に問て言わん、「基督の十字架てふものわ推理法に依て知るべからざるものなりとならば汝の之を信ずるに至りしことの何ぞ遲きや、之小兒も信じ得る眞理なり、十數年前の昔汝が洗禮を授かりし時此單元なる眞理を信じ能わざりしか」と。

然り讀者よ、然れども君の未だ人類の最も單純なる眞理を最も後に知るものなる事を認めざる可らず、萬物の單元より繁雜に向つて進むと雖も人の思惟のみの繁雜より單元に向つて進むもの也、罪に沈める人間の外貌の虛飾を好むものなり、先づ外を改て而後内に及ぼさんとするの普通人の常態なり、余の社界風紀の改良に先じて國家經濟の增進に注目せり、眞率なる信徒の養生に先じて理想的基督教會の設立を計畫せり、余の靈魂の救はれざる先に聖人の行をなさんと勉めたり、然るに自然の順序に戻れる方法の一ッとして成功すべき理なければ、余の方策は悉く失敗なりし、而して失敗に失敗を重ね、失望に失望を加へし後、刀折れ矢盡きて如何ともする能はざるに至りしや、「この苦しむもの叫びたれバエホバこれをきゝ、そのすべての患難より救ひいだし賜へり」(詩篇卅四篇六節)、嗚呼人の窮せざれバ眞理に來らざるが如し、余の曾て米國に於て或る武器製造所に至りしや、其支配人なる退職陸軍士官某余に近世の改良に係る大砲小銃を說明しくれし際、余の彼に問て曰く、「君に聞かん君の人類の何時戰爭を止むるに至ると思ふや」と、彼眞面目に余に答て曰く、「されバなり武器の改良充分に進歩して戰爭場に出るものは敵も味方も一人も殘らず打殺さるゝの怖懼を抱くに至らざれバ人類の戰爭を止めざるべし」と、吾人が神に歸るも亦然あるに非ずや、(路加傳十五章を讀め)、金のある人、智慧のある人、然り德のある人の容易に十字架の耶蘇に來らざるなり、貧乏人、無智のもの、罪人、嗚呼窮せざれバ基督の酒宴に侍るものの如なきが如し、

イエス彼に曰けるの、或人おほいなる筵を設て多賓を請けり、筵のとき僕を其請ひたる者に遣して百物はや備たれバ來るべしと言せけるに、彼等皆同く辭ぬ、其始の者彼に曰けるの我田地を買たれバ往て視ざるを得ず、願くの我を允し給へ、又一人の

者いひけるハ我五耦の牛を買たれバ之を試むる爲に往ん願くハ我を允し給へ、又一人の者いひけるハ我妻を娶たり是故ヨ往ことを得ざる也、其僕かへりて此事を主人ヨ告けれバ主人怒りて其僕に曰けるハ速かヨ邑に衢巷に往て貧者、癈疾、跛者、瞽者などを此ヨ引來れ、僕いひけるハ主よ命の如く行り、然ど尙あまりの座あり、主人僕に曰けるハ道路や藩籬の邊にゆき强て人々を引來り我家ヨ盈しめよ我なんぢらに告ん彼まねきたる人々ハ一人だに我餐を嘗ふ者なし(路加傳十四章十六節ー廿四節迄)

然れども嗚呼神ヨ爾ハ何故に余が爾を求めつゝありしに門を開て余を迎へざりしや、余の路頭ヨ迷ひし樣ハ爾の憐憫を惹かざりしか、余が眞理を見る能ハざるより苦痛ヨ苦痛を加へつゝありしを見て爾ハ手を束て傍觀するに堪へしや。

惠ある聲ハ答て曰く、神の忍耐ハ偉大なるかな、彼ハ彼の子供が苦しむを見て忍び得るなり、神が汝を救ハざりしは汝を救はんと欲すれバなり、半生間の汝の漂泊煩悶ハ汝をして自己の念より解脫せしめ全く我に賴らしめんが爲なり、汝を苦しめしものは汝自身なり、我に凭たれよわれ汝の罪を贖ひ善より善に汝を導き、汝をして我の爲に世を救ふの力とあさんと。

余答て曰く、

父よ然り、それ此の如きは聖旨に適へるなり

(馬太傳十一章廿六節)

最終問題

余の平安を得る途を知れり、然れども途を知るの必しも途に入るにあらず、基督に於ける信仰の余を罪より救ふものなり、然れども信仰も亦神の賜物なり(以弗所二章八節)、余の信じて救のいのみならず亦信せしめられて救のいるものの也、此に於てか余の全く余を救ふの力なきものなるを悟れり、然れば余の何をなさんか、余の余の信仰をも神より求むるのみ、基督信徒は絶間なく祈るべきなり、然り彼の生命の祈禱なり、彼尚は不完全なれば祈るべきなり、彼尚は信足らざれば祈るべきなり、彼能く祈り能のざれば祈るべきなり、惠まるゝも祈るべし、呪のるゝも祈るべし、天の高きに上げらるゝも、陰府の低きに下げらるゝも我の祈らむ、力なき我、わが能ふことの祈ることのみ。

"But what am I?
An infant crying in the night:
An infant crying for the light:
And no language but a cry."

然らば我の何あるか、
夜暗くして泣く赤兒、
光はしさに泣く赤兒、
泣くよりほかに言語なし。

求安錄終

明治廿六年八月五日印刷
明治廿六年八月十日發行

定價 貳拾五錢
郵稅 六 錢

東京市小石川區上富坂町十七番地
著者 內村鑑三

東京市京橋區出雲町一番地
發行者 福永文之助

大坂西區土佐堀三丁目卅八番屋敷
印刷者 今村謙吉

東京出雲町一番地
發賣所 警醒社書店

大坂西區土佐堀三丁目
發賣所 福音社

版權所有

ヨ-47-79

廣告

内村鑑三君著

◎再版 基督信徒のなぐさめ

附錄 未來觀念の現世に於る事業に及す勢力

定價二十錢
郵税四錢

内村鑑三君著

◎紀念論文 コロムブス功績

附 コロムブス傳及肖像地圖入

定價郵税共
金貳十錢

70
137

70
137

020369−000−3

70−137

求安録

内村　鑑三／著

M26
ABI−0176